

これより瑞穂公園シンポジウム、第二部、パネルディスカッションを始めさせていただきます。

まずは、パネリストをご紹介します。

名古屋工業大学大学院工学研究科 社会工学専攻 建築・デザイン分野 准教授の伊藤孝紀（いとうたかのり）さん、

NPO法人岡崎まち育てセンターりた 事務局次長で、名古屋工業大学コミュニティ創成教育研究センター研究員の三矢勝司（みつやかつし）さん、

コーディネーターを務めますのは、株式会社都市研究所スぺーシア取締役、愛知東邦大学経営学部地域ビジネス学科非常勤講師の浅野健（あさのたけし）さん、

そして、名古屋市より名古屋市教育委員会スポーツ振興課主幹 長町宏一（ながまちこういち）です。

それではここからの進行は、コーディネーターの浅野さんにお渡しいたします。

浅野さん、よろしくお願いいたします。

（浅野）

よろしくお願いいたします。

私、この場、コーディネーターということで立たせていただいておりますが、簡単に自己紹介だけさせていただきますと、この名古屋の地域で、例えば西区で今、元気になっている、四間道・那古野（しけみち・なごの）エリアですとか、それから図書館の整備とか、それから区民ワークショップの場、さらには商店街の再生のワークショップの場、いろんな形で名古屋のまちづくりを担当させていただいている関係で、この場に立たせていただいているのかなと考えています。

短い時間ですけど、よろしくお願いいたしますと思います。

もう既にね、ここまでお三方にお話いただいております、もう2時間ぐらい、もう過ぎちゃっているんじゃないかなぐらい、盛りだくさんなことになっているわけですけど、今日のこの瑞穂公園、やはり、「人がつくる。人とつくる。まちも、公園も。」というチラシのキャッチコピーにもありましたように、やはり、この瑞穂公園がこれから変わっていくんだ、っていうところをお伝えしていきたいということで、このシンポジウムを主催した、という名古屋市さんの考えでいるかな、ということがありますので、まずですね、このシンポジウムの成果目標として、3つのことを掲げさせていただきたいと思います。

まず第1に、この瑞穂公園のマスタープランの考え方っていうのを知っていただく、そういう場にしていきたい。

2番目に、この瑞穂公園っていうのが、市民と行政、さらには整備手法のところでもありました、企業の方が関わるということで、市民、企業、行政が一緒になってこの瑞穂公園、周辺のまちをより良くしていく、そしてやはり、楽しくということが必要だと

思っていますので、この三位一体で楽しい、そういう場を作っていく、それにはどうしたらいいのか、というところのご示唆、これは特に 2 人の先生かなというところがあるかと思いますが、ご示唆をいただけたらなという風に思っています。

そして最後に、瑞穂公園を良くするために続けていくというところ、この 3 つの点から、このシンポジウムというのを続けていければいいかなと思っています。

では、まず最初にですね、長町さんの方から、この瑞穂公園について、先ほども担当の松井さんの方から、ご説明があったかと思いますが、この瑞穂公園に対してどういう思い、熱い思いをもって取り組んでみえるか、ということをお願いしていただけたらなと思います。

よろしく願いいたします。

(長町)

はい、ありがとうございます。

私、今、瑞穂公園の整備を担当させていただいております。

今、やはり大きなことといたしましては、令和 8 年度のアジア競技大会に向けて、整備ということで、陸上競技場の改築に取り組んでいるところであります。

その際にですね、いろんなご意見を伺う中で、本当に住民のみなさんが瑞穂公園というものを、とても大切に考えてくださっている、また、歴史のある公園だなということに改めて今、思っているところです。

例えば、スポーツという部分で申しますと、昭和 25 年には第 5 回の愛知国体があったりですとか、平成 6 年にはわかしゃち国体、また、平成 28 年には記念すべき第 100 回の日本陸上選手権があったり、そういった形で非常に大規模な大会もやっている公園だなということでございます。

また、普段の公園という意味でも、先ほどの私どもの主査も説明しましたがけれども、様々地元の方に使っていただいている、昔の思い出もあるでしょうし、何気ない遊具も、いろんな思い出があったりだとか、また、児童園ではかわいい子どもたちも楽しく遊んでくれています。

そういった、本当に大事にさせていただいている公園ですので、私どもとしては、陸上競技場の改築と併せまして、その他の部分の公園についても、できることをしていきたい、そういった思いをもって取り組んでいるところでございます。

(浅野)

それではですね、そういった熱い思いをもって取り組んでいらっしゃるわけですが、このマスタープラン、先ほども説明はあったかと思うんですけども、多岐に渡る内容でございますので、それをかいつまんで、ポイントというところをご紹介しますでしょうか。

これ長町さん、もう一回、お願いいたします。

(長町)

はい、では改めまして、まず、このマスタープランでございますけれども、陸上競技場の改築以外の公園の整備を、どのようにしていきたいのか、というところでございまして、こういったマスタープランの概要版というところも作っているところでございます。

やはり、公園のあり方ということになりますと、市民のみなさま、住民のみなさまが、どういった思いを持っていただいているのかということ、しっかりと、まず踏まえたいということもございましたので、令和元年5月にタウンミーティングということを実施をさせていただきました。

そのタウンミーティングでは、瑞穂公園をどういう風にしていきたいのか、という思いもいただきましたので、そういったことを我々なりに、しっかりと踏まえながら、今回、このプランを作っているところでございます。

そういう中では、この公園に期待することといたしまして、まず、スポーツの拠点ということで、しっかり誇りの持てる公園にしてほしい、というご意見もいただきましたし、また、ふらっと訪れたいくなる公園ですとか、子どもが遊んでいる姿を眺めながら過ごせる公園、そういったこともしていきたい。

また、緑も大切にしていきたい、そういったお話をいただきました。

そういった意味では、私どもといたしましては、先ほど説明しましたけれども、整備の方向性といたしまして、スポーツによる賑わいの創出、これはトップスポーツから普段のスポーツまでであると思っております。

あと、市民の交流・憩いの場となるような、ふらっと訪れていただけるような公園、今はスポーツ施設様々ありますけれども、スポーツがない時に、何気なく訪れるというところが、もう少しあってもいいのかなと思いますので、そういった交流の場になるような形にしていきたい、そういった思いも持っております。

あとは、緑陰広場、陸上競技場東側の広場も、非常に豊かな緑、しっかりと維持していきたいですし、そのほかにも、例えば、野球場の東側から南児童園に歩いていただきますと、本当に木々が豊かで、広がりを感じる場所ですので、そういった自然も保存していきたい。

また、いろんな貝塚など史跡がありますので、そういったものも保存したいですし、何気なく訪れた方が、ここに歴史の遺跡があるんだ、そういったことも感じたい、そういった意味で、先ほども申し上げた名古屋の歴史の始まりに触れる、そういった4つの方向性を示しまして、やっていきたい、そのための、今、プランをお示ししております。

(浅野)

ありがとうございます。

実は、私も名古屋市民でありまして、小さいころからっていうか、特に学生時代ですよ、ね、小中高大という風にいきますと、特に小学校、中学校、このあたりで運動部系に

入っていると、必ず1回は瑞穂に訪れたことがあるんじゃないかということで、やはり、そういう意味でいうと、この瑞穂公園というのは、市民にとって関心の高い場所かなという風に思っています。

ただ一方で、スポーツの場所だということで認識をしてきたわけですけど、今お話をお聞きして、ただ単にスポーツの場だけじゃなくて、例えば、三矢さんのお話にもあったように、実は山崎川が、ど真ん中に流れているって、改めてお話聞くと気付くということがあったり、それから、貝塚の場所だということ、国指定の貝塚があるなんて、誰も知らない。

ただし、この貝塚というのは、実は、シンボリックなものではなくて、ただ単に1回通れば終わるとい程度のものかなということなので、むしろ普段の何気ないところで、こういう空間があるということが、実は、その見せ方とかが大切なのかなということの中で、先ほども伊藤先生のミラノの事例とかにあったように、ああいう見せ方とか、いろんなことがありそうだなということ、感じたところでございます。

そういったことを踏まえまして、まず伊藤先生から、このスポーツの公園、それ以外の部分で、既にいろんな形の見せ方があるよということ、先ほども事例で紹介していただきましたが、その中で1つ、2つでも結構ですので、ヒントとなる活動とか、作り方とか、そういうところで、事例をちょっとご紹介いただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

(伊藤)

先ほどの講演の中でも事例を踏まえて話してきました。

何か1つの目的だとか用途だけではなくて、そこで佇んだ時にどんなことが起こるんだろうということ、ある程度予測した設えの仕方だとか、もともと、更地の状態で作るわけじゃないじゃないですか、もともと、街並みから既存の公園のあり方というのが、あたりしますから、それを如何にうまく演出して活かしていくのか、この視点が重要だなと思います。

私自身が、非常にこだわった方がいいなと思っているところは、今ちょうど、三矢さんの話にもありましたが、管理運営と、そこを作ったり設計したりしていく人達が一緒になった方がいいんじゃないかな。

民間の活力を、もちろん活かしていくっていうのは重要なんですけど、作る人は作っただけとか、運営は運営で指定管理で後でとか、なってしまうと、本当の使う人たちのニーズだったり、こういうところの管理動線だとか、こういうところに、手をちょっと加えてほしかったりという、つぶさな小さい事柄を見失いがちになってしまうというか、見落としがちになってしまう。

そういったところが、一体として、チームとして、もし取り組むのであれば、そこで使う人たちは、「こういうことに必要だよ」とか、「こういう運営管理をするときに、こういう風だよ」といったことを踏まえて設計するはずなんですよ。そこが大事かなと思いますね。

(浅野)

ありがとうございます。

先ほどの先生のお話の中でも、やっぱり誰が主役かっていったら、やっぱり市民だっ
ていうことがあるかなと思うんですけど、そのあたりどうでしょうか。

(伊藤)

何か、すごい、今回は大きな規模なので、一つ間違えると、すごくオブジェクティブ
で、ものすごく、こう、言葉があれですけど派手な、見栄えがする、そういったものを
要求しているわけじゃないんだっていうのを、このシンポジウムを含めて、今一度、
再確認してもらえたらなと思いますね。

市民がやっぱり主人公で、そこに訪れる人たちが主役なので、その人たちがどういう
風な記憶だとか、体験だとか、価値を見出して、そこで過ごしてもらうことを、もう1
回、何度も来たくなるっていうような仕掛けになっていく、その積み重ねが、結果と
して、シンボルであり、そして、それが愛着であったり、誇りであったりにつながる、
こういう当たり前といえば当たりの構図を、しっかりと作り上げるってことが、大切
だなと思ってます。

(浅野)

ありがとうございます。

そのシンボル性とか、先生のご説明の中には、いろいろなキーワードがちりばめられ
ていたのですが、根本となるのが、市民が主体であって、そこへ行くためのストーリ
ーが、きちんとシンボル性を組み立てるまで、そこが一貫していないとよくなくて、そ
れをちゃんと、作る側と運営する側が一体となった、そういう仕掛けが必要だよ、そ
ういうことでよろしかったでしょうか。

(伊藤)

はい

(浅野)

ありがとうございます。

そういった、特に運営側でいくと、やはり三矢さんが得意だと思うんですけど、岡崎
の事例では、いろいろ運営とかかれて、実際に市民主体を支援する側として動かされてい
て、これが実は岡崎だけじゃなくて、東海エリアだけじゃなくて、いろんな地域で支援
されてきているわけですけど、そのお立場から、じゃあ今度、市民主体を運営する側
から整備する側に若干、要求っていうわけじゃないですけど、そういう視点で少し、事
例とかお考えとか、いう形でお聞かせいただくとありがたいなと思います。

よろしく願いいたします。

(三矢)

もちろん、現状でも、すでに名古屋市さんが、こういう風にタウンミーティングを開いたりだとか、いろんな意見を回収しようっていう風に、市民の意見を伺いますよっていう、この回路は、すでに動いているということはあると思うんですけども、次の一手でやった方がいいかなと、市民参加の立場でやった方がいいかなと思うことは、市民同士の対話だと思うんですよね。

Aという人は、あれがほしいとか、Bという人は、こうしたいとか、Cという人は、こうだという話があって、もちろん市としては、A・B・Cの全部の意見を踏まえると、こういうことですかね、ということで、しかるべき判断をして、着地させるということはあるんだけど、ひょっとしたら市民の中で、「Aっていうことを言う人がいるんだ」とか、「Bっていう考え方もあるんだね」ということを相互に学びあうことによって、より発展的な活用に向かって発想が広がったり、さらには自分の関わり方が変わったりということがあるかなと思うので、そういう使う市民の側の対話の場みたいながあると、なお良いんじゃないかなというのが、僕からの提案というか、アドバイスなんですけれども。

(浅野)

ありがとうございます。

特に市民との対話の場というのが、よくありがちなのが、1回こっきりっていうのが、良くて、それが続いていくと、AとBが、全く反対意見だった場合に、そのAとBを、ずっと話し合うことによって、どこかでこう、折り合いっていうわけじゃないですけど、ここを理解すれば、ここをこう工夫すれば、実は一緒にやっていけるという可能性もあるわけですよ。

そういった中で、今までの事例の中で、例えばそういう風に、若干意見が違っていても、ここここをカバーしあえば、うまくいったんだと、何かその辺の、少しヒントなんかもいただけたらと思うんですけど、どうですか、三矢さん。

(三矢)

そこは、浅野さん自身も、日ごろやられると思うんですけども、僕らのような市民参加のコーディネーターというのは、いわゆる話し合いの場というか、ワークショップみたいなものを組み立てるし、そこで、例えば、対立するAという意見、Bという意見、それを超えるCという意見、アイデアをどう生み出すのか、そういう人々の対話をどう組み立てるのか、ということに向かって、僕ら一生懸命準備して、どういう情報を前提条件として共有したらいいだろうかということ、あらかじめきちっと整理をしたりだとか、あるいは、どういう話し合いの仕方というか、専門的にいうと、ワークショップのツールとか、グッズっていうんですけども、そういうのを提示することによって、素直に発言しやすくするし、そこから、お互いの対話をどういう風に組み立てるのか、

そこは、ある程度、放っておくと単なる対立でしかないので、何らかのコーディネーターなのか、議論を取り持つ第三者みたいなものが必要かも分かんないんですけども、まあ、そんな風に思いました。

(浅野)

ありがとうございます。

こういう市民同士の対話のやり方のテクニックっていうか、そのやり方には、それをちゃんと取り仕切れる方がいるんだなということで、これから続けていく上での仕組みとして、必要だなということがあるかなと思いますけど、ここまで受けて、長町さんの方から、感想とか、一旦いただけると。

よろしくお願いします。

(長町)

それぞれ本当にありがとうございます。

まず、整備と運営が同じであるべきだということを、まず教えていただきました。

この点につきまして、私どもとしても、PFIということで、陸上競技場の改築、その他公園の整備、そして公園全体の運営を一体となって進めていきたいという風に思っておりますので、この点については、我々としても、このまま進めていきたいと思っていますところであります。

その上で、さらに、市民の方のご意見とか、小さなところにも気付くようにですとか、そういったところを、しっかりと踏まえていくべきだということも思っているところです。

また、運営という部分でも、先ほどのご講演でもありましたけれども、運営についても市民の方の力を活用いただけるだとか、そういったところも、工夫していきたい、そんなことを改めて思っているところです。

(浅野)

ありがとうございます。

(三矢) ※挙手

おまけでということですけども。

さらに、この瑞穂公園のことが、いろんな人にとって自分事にすることがすごく大事だなと思っていて、市民参加の立場から考えると、従前の利用者というかね、今、この競技場を使っている人とか、公園を使っている人っていう、みなさんの声を、きちっと拾うってことも大事だと思うんだけど、我々がイメージを広げないといけないのは、未来の瑞穂公園がどうありたいのかとか、どんな人たちがどんな風に使うんだろうか、というところにイメージを広げるべきであって、ちょっと僕の勝手な提案なんですけど、先ほど浅野さんの話で、運動部というかね、スポーツをやっている人にとっては、

必ず1回は行くのが瑞穂公園であり、瑞穂競技場なんだという話がありました。

それを、これからの次の新しい瑞穂公園は、誰もが1度は行く瑞穂公園という風になつたらいいんじゃないかと思ったんですよ。

僕、ちなみに高校のとき美術部だったんで、行かないよね、みたいな話があるわけですよ。

なんだけど、美術部なんだけど、瑞穂公園は年に行くべき場所、みたいな、という風になるにはどうしたらいいのか、みたいな、そういう風に、多様な方々に使ってもらえる、関わってもらえるという風にするには、仕掛ける側のイメージを広げておかないと、こっちが声を聴こうとしないと、向こうも声を出さずきっかけを失ってしまう可能性があるんで、そこが大事かなと思います。

(浅野)

ありがとうございます。

名古屋市さんが作ってきた瑞穂公園のマスタープランの中では、スポーツと、それから市民の交流・憩いの場、そして自然環境の保全、そして名古屋の歴史の始まりに触れるという、4つの柱がある、これは、方向性としては、まず市民の方に、理解してほしいし、それを知ってもらうためには、いろんな手法の中で、今、三矢さんがおっしゃったように、普段使っている人だけではなく、誰もが、瑞穂のことを、名古屋市民ならイメージを持てるとか、そういう風にしていくような仕掛けっていうのは、いろいろ必要なんだろうなということは、今のお話から理解できたかなという風に思っております。

だいたい、整備の方向については、これを理解していただくように進めていくという、そういうことでよろしいでしょうかね。

(伊藤) ※挙手

(浅野)

どうぞ、どうぞ。

お願いします。

(伊藤)

昨今、PFI事業ということで、民間の力をどんどん借りて、公共だけじゃなくて、民間のアイデアだったり、いろんな経験だったり、スキルを使ってやっていこうと、それが各所でですね、始めて、もうかなりのいろんな事例もできていると思うんですよ。

そこで、いろんなことも分かってきたことも、あると思うんですよ。

例えば、やっぱり、民間さんのアイデアだとか、いいところもあるんだけど、やっぱり収益だとか、収支だとかというところに重きを重んじるあまりに、本当は、ここは頑張らなくちゃいけないという、景観に対してだとか、地域の取り組みを、もっと拾

い上げるだとか、そこんところって収益を生まないから、どうしても二の次になっちゃう、その二の次になっちゃうところを、きっちりとすくい上げていくっていう、何か今までの課題がちょっとずつ見えつつあるんですよ。

その課題を、うまく、今回の瑞穂では、なんか、変えていって、次のPFIの新しい形みたいな、今言われた、三矢さんの、市民の対話の場所にもなっていく、かつ、それを作り上げていく過程でも、一つ抜け落ちていないかという、ちょっとガイドライン的なもので、もしかしたら専門家がきちんと並走しながら行くだとかですね、次なる次世代型みたいなのを、この機に名古屋市さんが打ち出せるかどうかで、すっごく大きな課題だと思うんですが、っていうことだけ、フリながら。

(三矢)

そうなってくると、ちょっと僕も、ここに渡る前に一言、途中下車してもらいたいですけれども、今のご指摘、すごいそうだと思っていて、もちろん、民間企業が関わることによって、いろいろと質が上がるとか、いいことがあるというのも事実だし、一方で収益が上がらない部分に対する、目くばせの薄さも懸念されるっていうことは、事実だと思うんですよ。

そこに対して、僕は、先ほど市民の公園に対する関わりの重要性を説いたわけなんですけれども、当たり前なんですけれども、行政の関わりも、すごく大事っていうかね、お金儲けにはならないんですけども、自然を愛でる活動がやりやすいとかね、子ども達が、そこら辺で、たむろできることが楽しいなみたいな、それをちゃんと担保するというかね、そういう活動も、収益が上がる活動と収益が上がらない活動が、並走できる、共存できるようなことは、誰が担保するべきかという、行政がきちっと、目を配るといふかね、そこは、民間任せではなくて、行政としても、きちっと目配せをしていくぞと、そのスタンスが問われているんじゃないかと思います。

(浅野)

いい感じで、実はですね、二つ目のテーマに入っていくことができましたので、二つ目のテーマの方で進めていきたいという風に思っています。

お二方の先生から言っていただきましたように、昨今、PFI事業というのは、各いろんな公共施設を運営するときに、民間活用の手法として、有効な手法として使われるようになってきています。

確かに、民間活用によって、一番目に見えるところは、利用が増えるということであったり、それから三矢さんが言っていたように、収益性が上がるということだったりというところで、目に見える形で出てきていると。

ただ一方で、伊藤先生におっしゃっていただいたように、民間だからこそというところが出てくる、課題として、やはり先生がご専門としていらっしゃるデザインとか、街のデザイン、景観デザインというところに対して、このPFIというところで見るときに、果たしてどんなものか、ということが出てくるかと思っています。

そういった時に、もうすでにヒントはいただいたかと思いますが、改めまして、PFIをやるときの注意点というわけではないんですけど、うまくPFIを次世代につなげていく、新たなPFIモデルとしていくために、こんなことをしたらいいかということで、お二方に、ちょっと、いろいろご示唆を頂けたらいいかなと思いますが、伊藤先生から、お願いできますでしょうか。

(伊藤)

例えばなんですけど、私が設計やデザインをするとか、携わるだとか、乃至は、まちづくりに携わる時っていうのは、必ず、その地域の人たちが何を考えて、どういうニーズがあったり、課題があるかというのを、つぶさに聞いたり、サーベイといって、いわゆる調査をしていく、この積み重ねをせずにですね、答えである設計の形だとか、デザインのあり方みたいなものって、見えてこないと思うんですよ。

自分自身も、何かを取り込むのであれば、まずは、そのヒューマンスケールで、住民市民の視点として、同じように課題だとかを見えるような、つぶさに通ったり対話したり、その積み重ね、意外とそれが面倒くさいんではあるんですけど、正直、でも、そういうものを積み重ねた形って、本当の意味で私が提示した名古屋らしさだったり、市民が誇りに思えるものにつながると思うんですよ。

そして、たぶん、そういうことを積み重ねたからこそ、使ってもらう利用者の方々にも、優しさが伝わってくると、私は信じているので、できれば、そういうつぶさなことを、面倒くさいと思わず、きっちりやってほしいなと思います。

(浅野)

ありがとうございます。

では、同じような形で、三矢さんからもご示唆いただければと思うんですけど。

(三矢)

僕自身、そんなに、専門家として、PFIが国内で、こんなことが起きているんだとか、名古屋市内で、こんなことが起きているんだということぐらいは、把握してはおるんですけども、そんなに直接、僕自身がやっているわけではないんですけども、思ったこととしては、先ほど、僕のプレゼンの中で、計画段階というか、形を作る場面での市民の関わり、さらには、動きを作っていく上での関わり、さらに仕組みを作っていく上での関わりっていう、三段階をきちんと地続きで、どういう風に市民が関わられるのかっていうことが大事だっていう風に言いました。

僕の解釈では、伊藤先生の、市民のいろんな思いだとか、利用実態だとかを、つぶさに調査したり、あるいは地域のみなさんと関係を築いていくということは、どちらかという、計画段階の、実際にそれを仕掛けるPFIの事業者さんと地域との関わりの話だと思うんですよ。

僕はさらに、もう一歩進んで、そのあとに運営段階において、どういう風に関わりが

できるんだろうかということ、何かしら仕組みを作る必要があると思っていて、これが一番妥当な例かどうか分からないんですけど、先ほど僕は、籠田公園（かごだこうえん）の様子をご案内させてもらっていて、あそこでは、ボランティアの方々が月に1回、みんなの顔を合わせることに合わせて、お掃除しようよ、みたいな、ボランティアな清掃活動っていうのが起きているっていう風に言いました。

一方で、岡崎市、行政としましては、きちっとクオリティの高い芝生にしたいということがあって、しかるべきお金を業者さんに払って、企業さんがそこを管理しているということが、実際に起きている、やっつけているということがあります。

それを企業にお願いしているから、市民の参加がいらないということではなくて、企業さんにお願いする部分と、市民のみなさんに関わってもらいたい部分というのが、実は、区域というか、ここの芝生の部分は企業さん頼むねとか、この休憩所の部分は市民のみなさん頼むねみたいな、という風にルールを、行政の方で整備してもらうことによって、企業も市民も、上手に公園に関わってもらっているという、そういうことが例えばあります。

ということで、同じことなんですけど、そこには、企業さんの取り組みと市民のみなさんの関わりが、上手に折り合っていくためには、行政の振る舞いが、非常に重要になるんじゃないかということ、二度目ですけど、もう一度、言わせていただきます。

（浅野）

はい、何度も言っていたけるといいかなと思うんですけど、その辺も含めて、いろいろ折り合いをつけるところだとか、単純にお金を預けて、企業の方が運営するだけだと、例えば、もう、年に2回しか芝生管理しないということが、グラウンドゴルフの方がやることによって、月2回は清掃されるって、それできれいなものが担保されるっていうことがあったり、それから、先生の方も調査に入られる時には、やはり丁寧な対話、市民の方の対話の中で設計を作っていくっていうことを信条にされているものですから、その辺のことが最終的には、優しさにあふれるとか、誰もが使えるっていうのは、いろんな形で使えるっていうことは、設計の方が今まで、あんまりやってこなかった、一つ課題かなっていうのは、私自身も思うことがありまして、スポーツの場っていうと、健常者だけじゃなくて、例えば、障害の方だって当然使って、今だったらパラリンピックって当たり前のように、これからなっていくってことになる、そういうスポーツ選手、パラ選手がスポーツの空間を使うって、当然あり得るわけですよ、そういういったところだと、ますますこの、空間を作るところでの聞き取り調査って重要になってくると思うんですよ。

特に、外国のパラ選手って、めちゃめちゃ体でかいので、車いすも特注ですよ。

そういったところを踏まえて作ってくると、まさに先生おっしゃったような、優しさというのは、やはり誰にでも優しいって先生おっしゃいました。

いろんな方に優しい空間を作っていくということが必要になると。

そうなったときに、やはり住民目線、あるいは競技者目線、いろんなことでのリサー

チが必要になってくるかなってというのが、先生のお話から伺えるところですし、すみ分けというところで、三矢さんのお話として、市民の方、企業の方、そこを行政がうまく支援するというか、あまりコントロールという言葉を使いたくないので、支援するという形で三位一体が作れるかなというのは、お話を聞いていて思ったんですけど、その辺の感想でもいいと思いますので、長町さんの方から、お願いできればと思います。

(長町)

それぞれありがとうございます。

今回のマスタープラン案を作るにあたりまして、冒頭も少し触れましたが、タウンミーティングを実施させていただきました。

本当に、たくさんのご意見をいただいて、本当にありがたく思っています。

その中には、今回の公園について、スポーツの拠点として、しっかりしたものを作ってほしいという部分と、また、気軽に楽しめる公園、ふらっと入ってこれるような公園にしてほしい、まさに誰もが何度も訪れる公園にしてほしいですとか、その中には、子どもとか高齢の方、障害を持って見える方、みなさんが使いやすい公園、これは競技場も含めてだと理解しておりますけど、してほしいというご意見もいただいていますし、座りながら、スポーツをしている人を眺めたりですとか、子どもは元気に遊ぶけれども、親はそれを眺めたりだとか、いろんな使い方、そういったものにしていきたい、また当然、自然をしっかりと守っていききたい、そういったことは、改めて考えながら作っておりましたし、今お話を伺って、よりしっかりしていききたいと思いをもちました。

また、行政としまして、民間でのアイデアをいただくという部分と、それぞれの住民のニーズを拾うということも大切だということ、改めて感じておりまして、今回、瑞穂公園の整備にあたりましては、住民の方々にとって、瑞穂公園の整備で良くなったなと、使いやすくなったと、誰にも優しい公園になったということを目指したいと思っていますので、そのためには、計画する段階ですとか、運用の段階でも、市民の方に、いい公園だし、自分も参加したいなと思っていただけるようなものを整理していくのが私ども行政に課せられた課題だということ、改めて思っていると、そういう状況です。

(浅野)

ありがとうございます。

クロージングに行く前に、もう一つだけ確認しておきたいことがありまして、瑞穂公園ですので、スポーツという、部活動でも大会なんかで使う場、もちろん日常的に借りられる場っていうのもあるかもしれませんが、基本的にはグランパスを頂点とした、まさにプロスポーツもやれるような、ものすごいハイレベルな、それは非日常空間ですよ、先生もおっしゃったように。

先生のお話をお聞きして思った部分が、私も思った部分があったのが、非日常の部分ていうのを最後にもって、説明されていて、日常の瑞穂公園の使い方が、すごく重

要だなということ、先生のお話からくみ取ったわけですけど、そうやっていくと、このスポーツ施設がありながら、山崎川がある、そして、図書館、文化小劇場がある、そして、貝塚がある、そういう空間の中で、いかに日常から、この瑞穂公園に来てもらうか、という活動でだったり、設えだったり、景観だったり、というのが必要になってくるかなと思うんですけど、その辺、もう一言だけ両先生から少し、ポイントとなる視点をアドバイスいただけると、ありがたいなと思うんですけど、いかがでしょうか。

(伊藤)

昨今、例えば、違う視点で見ると、観光地とかで活性化をしようとかっていう、商店街でもいいんですが、何か活性化しなくちゃいけないっていった時に、何かすごいことしようと思ったりすればするほど、実は悪循環して行って、それよりも日常的に、その周辺の方々だとか、そこで住んでいる方々が、普通に利用して楽しんで、笑顔が溢れてるみたいなのところの、その姿を外国からくるインバウンドの観光客の人たちも、日常の日本の風景というか、普通の景色とか、ライフスタイルだとかを体感したいと。

何か、すごいところを見て、聞いたりするんじゃなくて、新しい日本人ならではの、ないしは名古屋らしい、こういうあり方みたいなのを体験してもらって、体験したい、そういう体験価値みたいなものが、とっても大事な時代に来ているんですよね。

それを考えると、もちろん、瑞穂公園のもともと資源がありますから、それを活かした体験価値を生む仕掛けって、何だろうなっていうのを考えた方がいいかな。

何か、ホームランを狙って、大振りしてくってっていう開発じゃなくて、バントでもいいから、ちっちゃくいろんなことが起こっていて、もっと言うと、たとえ方が良くなかったかもしれない、野球だったらバントだけど、サッカーだったらこうでみたいな、いろんなちっちゃいことがいっぱいあって、それが世界的にスーパースターのなシュートを打てるとかね、そういう姿じゃなくても、たぶん、いい時代に来ているんだなあと思うんですよね。

(浅野)

サッカーでいうと、パスのつながりですね。

(伊藤)

ああ、そうですね、そういう感じですね。

もうちょっと、フットサルで考えた方がよかったかもしれませんね。

(浅野)

ありがとうございます。

名古屋らしさというのは、キーワードの一つとして上がってくるかと思しますので、名古屋らしさを瑞穂公園から発信していくということは、多分できていくんじゃないかなと思うので、そこは期待できるかなと思います。

じゃあ、三矢さん、お願いします。

(三矢)

伊藤先生からのご指摘の言葉で、もちろん華々しいグランパスの試合があって、どかーんみたいな、非日常の熱狂みたいなことも、それは大事だし、一方で、豊かな日常というかね、瑞穂公園に行くと、本当に豊かな日常にあふれているよね、みたいな、そういう風景を、どういう風に用意できるだろうかという、そこが結構大事なかなという風に思っていて、僕の結論は、瑞穂公園全体を全部使い倒すっていう、その発想が大事だと思います。

何かっていうと、例えばなんですけれど、事前に名古屋市からもらった資料の中で、宿泊研修施設のリノベーションを考えてますよみたいな話があって、あんな使い方、こんな使い方みたいな、例示が、見たんですよ。その中の一つに、例えば卓球ができるような軽運動室とかがあったらいいかなみたいなキーワードがあって、この発想が古いうていうか、豊かな日常に向かっていない、と僕は叱りたいんです。

卓球は山崎川沿いでやるとか、ボールが落ちちゃう。オープンスペースでやるとかね、この機能イコールこの部屋っていう、たぶん伊藤先生のところで、設計でそんな程度のもが出てきたら、アカンやろって、たぶん言うと思うんですよ、もっと豊かな発想というか、こんな場所でこんな使い方ができるんだとか、こんな場所でもこんな風に過ごしていいんだっていう、もっと柔軟に、公園全体を、あそこではこんな使い方、ここではこんな使い方ができるんじゃないかっていうことを、どんどんどんどんイメージを高めていって、ちょっとやってみるとかね、ちょっとここ卓球台を置いてみようかなとか、ちょっとやってみようかなみたいな、試しにいろいろとやってみる、最近の都市計画というか、まちづくりの手法の中で、ぎゅーっと全部決まってドカンと作るというよりは、ちょっとこんな感じかな、試しに使ってみようかな、ちょっと仮のコンテナでも置いてみながら、こんな使い方どうかなみたいな、ちょっと仮の使い方を社会実験と称してやってみながら、「いいね、いいね」みたいなところでバシみたいな、何かそういうことを、全部、企業さんをお願いしますよだと、ちょっと儲かんないんですけどみたいになっちゃうかもしれないんで、お試しの部分は、行政の方からも、若干サポートいただきながら、本格的な整備のところは、民間さんバシっと思いますみたいな、そういう、なだらかなというかね、柔らかく使ってみて、しっかりした形が見えてきたら、企業さん、どーん、みたいな、そういう市民と行政の連携、そこから企業のお力添えみたいな、そういう連携プレーが取れると、なおいいんじゃないかなという風に思いました。

(浅野)

ありがとうございます。

まさに、三矢さん、先ほどから、ずっと言っていたように、連携プレーというのもそうですし、続けていく仕組み、整備段階から続けていく仕組みっていうの

を、三段階ぐらいでずっとお話いただいて、例えば、形、動き、仕組みというお話ですか、その続けていくためのヒントとしては、大きなホームランを打つんじゃなくて、まずはバントとか、小さな活動の積み重ねっていうご示唆をいただけたかなという風に思います。

ということでいうと、瑞穂公園を、これから良くするためには、工事としては始まる、工事自体は始まるんですけど、工事は、公園が全部工事のエリアになるわけではなくて、ある施設ごとから順に始めていく、そういうことですよ。

そうすると、まだ工事をやっていない空間は、全然使えたりとか、場合によっては、工事現場で拠点を出しちゃうような、岡崎のような事例なんかもあるかと思いますが、いわゆる小さな取り組みから始めていくっていうのが、一つ、今後、続けていく取組みのヒントになるのかなということがあるかなという風に思います。

なので、その最初の一步、このきっかけづくりって、たぶん名古屋市の方、いつも悩まれて、例えばタウンミーティングはやってみただけど、どうなんだとかいうことだと思うんですけど、そのきっかけづくりのところで、ヒントとして、どこから始めたらいいかなというところとか、その辺なんかで、ちょっとお二人から、まず、ご示唆をいただけると、ありがたいなという風に思うんですけど。

その辺は、いかがでしょうかね。

はい、お願いします。

(伊藤)

今、三矢さんから、本当に良いご示唆があったと思うんですけども、社会実験って、本当、私は、一番の武器だと思っていて、もちろん、スタジアムとしては、アジア大会のメインのスタジアムなので、間に合わないといけないから、作らないといけないと思うんですが、重要なのは、スタジアムと公園との間だとか、公園と川とスタジアムをどう繋ぐとか、街と道路と公園をどう繋ぐかだとか、そのつなぎ目の領域を、どういう風に活かしていくか、ということが大事だと思うんですよ。

実際、多分やろうとすると、こっちは道路管理で、こっちは河川の管理で、こっちは名古屋市さんでいうと住都さんで、緑土さんでとか、教育委員会とか、大変なことになっちゃう。

だから、いきなりそれを繋ごうなんて思うと、たぶんシステムの難しいんで、社会実験でチャレンジしながら、いんなことを試してみてもいいのかなと。

チャレンジしていると、うちはこんな技術を持っているとか、こういう風に広告を出せるとか、こんなことをできるかもしれないという、民間の他のプレーヤーのみなさんも、どんどん集積していてもいいと思う。

知恵と技術とお金が回りだせば、また違う新しい公園の形も見えてくるかなと改めて思いました。

(浅野)

ありがとうございます。

では、三矢さん、いかがですか。

(三矢)

小さなきっかけを作るためにも、大きな構想がいるんじゃないかと、あえて僕は言っておきたくて。

僕は、その中では、きっかけ作りは、いろいろと問い合わせていただければ、僕は、いくらでもアドバイスをするので、今日の場合は、大きな構想の重要性を指摘して、僕のコメントとしたくて。

特に、伊藤先生のプレゼンの中で、街と繋がっていっちゃうっていうかね、街の中にもカフェ的な空間があったりだとか、ちょっとした寄り合えるような場所があって、それが公園の中にも繋がっていっちゃって、その公園の中にもまた、商店街みたいなものがあったりみたいな、街と公園が繋がりが合うっていう、ああいう考え方を、きちっと、まず仕掛ける側が持った上で、市民のみなさんに小さなきっかけを仕込んでいくというかね、場を設けていくっていう風な順番じゃないと、いかんかなと思ったんですよ。

さらに、浅野さんの、パラスポーツだとか、バリアフリーだとか、障害のある方でも来やすい公園づくりみたいなところとかも、その文脈で語られるべきというかね、街と公園が繋がりが合っていて、そのためには、どこを、道すがらが楽しいというようなことも、よくよく考えて、全体を考えて、道路から公園へ、さらには水辺へみたいなことが、全部つながっていくって、そこを大きく、きちっと捉えた上で、小さい仕掛けをやるべきだという風に思います。

(浅野)

ありがとうございます。

お二方から、いいご示唆をいただけたかなと思います。

私も経験上で、先ほど冒頭で自己紹介しました、西区の四間道・那古野エリアというところで関わっているんですけど、そこで起こっている動きというのは、まさに河川管理者である緑政土木局と、当然商店街があるので市民経済局と、そして歴史まちづくりがあるので、その部署、観光文化交流局であったり、住宅都市局であったり、都市景観室であったり、そして、それを束ねる地域まちづくりということで、まちづくり企画課が入っていたり、いろんな部署が関わりながら、このまちづくり協議会と協議を進めてきているということがあると思います。

そこで、小さなことをやるためには、大きな構想が必要だということの中の一つに、いわゆる組織じゃないんですけど、これも一つあるのかなと思ひまして、先生なんかのご専門としているエリアマネジメントなんか、まさにそういう動きだと思いますので、その中に、まずは、主体がいろんな方々が入っていて、当然そこに関係するのが、瑞穂公園だけではなくてくるので、道路管理者だったりとか、河川管理者だったりとか、公園管理者だったりとかと広がっていくと、なので、今は、一番のメインの主管である

教育委員会さんが出てきているんですけど、これから進めていくときには、当然、いろんな所管の局の方も関わっていただかなければいけないという風になるとするならば、地域に関わる団体も、それなりに、そういう人達が入って、一緒に公園を作っていく、そういうチーム作りというか、そういうのも必要になってくるのかなというのを、お二方のお話を聞いて思ったところでございます。

どうでしょうかね、そろそろ時間も終わりに差しかかってきたかなと思いますので、今の、今日のお話を受けまして、最後に行政の立場から市民のみなさんに向けて、メッセージを長町さんから頂けたらと思います。

どうぞ、よろしく願います。

(長町)

それぞれ本当に教えていただいてありがとうございます。

今回の瑞穂公園の整備につきましては、公園の一体感を高めるですとか、日常というお話をいただきました、スポーツの大規模な大会がない時にも、魅力があるような、ふらっと知らない間に入っちゃっているような、そういった場所にしていきたいという風に強く思っています。

そのためにも、今ある自然をしっかりと守るですとか、公園の中の歩行者の動きを考えた時に、今以上に安全に歩いていただけるようにしていきたいですとか、後は、ちょっとした賑わいの物があったり、オープンスペースを活用したりですとか、そういった工夫をしっかりとすることで、今ある公園をより良くしていきたいと思っていますし、スポーツの大きな大会と普段の公園の利用の両立、そういったものも、しっかりやっていきたいということを改めて思っております。

また、公園を周辺の住民の方にいいものだなと思っていただくためには、渋滞対策も大きな課題だと思っております。

瑞穂公園の周辺で渋滞が発生しておりますので、こういったことも、タウンミーティングでも様々なご意見をいただいております。

しっかりと対策を練っていきたいという風に思っております。

また、アクセシビリティといいますか、障害をお持ちの方にとっても、子どもにとっても、お年寄りの方にとっても使いやすい公園ということも大事だと思っておりますので、その辺についても、きめ細やかに、ニーズですとか、ご意見を踏まえながらやっていく必要があるなという風に改めて思っております。

(浅野)

ありがとうございました。

渋滞対策とかも含めて、いろんなことをやっていくということだと思います。

そういう、普段考えると、渋滞対策って、ネガティブ対策になりがちなんですけど、ここに心強いお二人の先生がいらっしゃるように、実は、その渋滞対策も、道路の使い方をみんなで共有し合って、もっと違う視点で、実は、楽しい空間に変えていくとか、

そういうのを、例えば実験を繰り返しながら作っていくことも、もしかしたらできるかもしれない。

今は、車、それこそ1家に1台の時代だけど、もう間もなくしたら、場合によっては車も減るかもしれない、そういった中で、よりよい街、名古屋の誇れる街、そういった誇れる街、誇れる瑞穂公園、それを作っていくためには、いろんな知恵をこれから出し合っていないと、たぶん、いいものにはなっていないと思いますので、強力な、ご支援いただける先生方もいらっしゃいますので、そういった方々のご支援もいただきながら、よりよい瑞穂公園になっていくといいのかなというのは、進行をしている私も、お聞きしながら思っていたところでございます。

では、お時間も来ましたので、このパネルディスカッションについては、ここで終了とさせていただきます。

忌憚ないご意見をいただきまして、みなさん、どうもありがとうございました。